

# 末黒野

すぐるの

3月号 (通巻775号)



# 玉子酒

小川玉泉

林道の木の実のぬくみ拾ひけり  
鬼の子や寺苑に人の影あらず  
産土や千木より高き銀杏散る  
雨宿す山茶花凜と時頼忌

冬青き浮草甕の蓮枯る  
貼り絵めく银杏落葉や心字池  
霜月の黄砂を泛べ手水鉢  
けふのことけふ済まされず玉子酒  
冬の水緑の戻る干若布  
貼り替へし障子の鳴りぬ小夜嵐  
電柱のなきみ空欲し冬夕焼  
池の面の冬満月の蒼さかな

# 残り鷺

松本三千夫

色変へぬ松や幽けき海の音  
水静か懺悔のごとく蓮枯れて  
冬三日月銀杏の瘤を磨きをり  
大マスクこちら見てゐる眼鏡の眼  
さびしらや鷹女は嫌ふ石菫の花  
極月の闇かきまはす救急車  
鳶の輪の楯円真円冬うらら  
トルソーへ師走のネオン点滅す  
向き変へて発つ気配なし残り鷺  
仕舞屋のピアノ零れ来花八手  
やさしさは強さ秘めをり冬木の芽  
鍋底へ青きガスの火厨凍て

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 蕪蒸し

清海 信子

枯芦を金色の日が包みたる  
沖小春つまみ上げたたる如き島  
落葉踏み音交はし合ふ男女かな  
葱提げて煩惱の歩の前のめり  
冬木の芽仰ぎ心に力湧く  
左右より話一度に日の短か  
思草思ひ尽せしさまに枯れ  
浅草へ被りはじめの毛糸帽  
白味噌をぼつたり掛けて蕪蒸し  
名を知らぬ鳥のよき声山眠る

## ふぐ鍋

黒滝 志麻子

冬紅葉昏れて水音残りけり  
雨の日は雨の華やぎ冬紅葉  
眠りたる山や日高の馬の郷  
楽焼の窯出しを待ち返り花  
漁火のいつしか殖ゆる冬銀河  
鳥ご糸の木々をこぼるる小春かな  
ワイン樽積む参道や名の木散る  
湯煙の沢に這ひ入る冬うらら  
ふぐ鍋や壁に力士の大手形  
鴨百羽浮かべて川の動かざる



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）  
太字は推薦句

冬 銀 河

吉田きみえ

土踏まず

安斎久英

木枯しの去りて夜明けの星一つ  
瀬の音の高まり溪の散紅葉  
**冬銀河子等と寝惜しむ峡泊り**  
木洩れ日の里の峠や冬椿  
近道を抜け産土の冬照葉  
はらからと少し早めの年忘れ  
しんがりと先頭に保母小春かな

神鈴のさやけき宮居黄落す  
畝ややにはみ出す冬菜畑かな  
律儀なる見習ひ車掌冬日和  
**落葉踏む齡重ねし土踏まず**  
軍港の今昔の感冬薔薇  
歳晩や並木通りを灯の帯に  
ガス灯や師走の街を足早に



小 春 大橋伊佐子

船洗ふ漁師に釣瓶落しかな  
柗の闇夜に白き香をはなつ  
花石路や軒を寄せ合ふ蚕の路地  
海からの日を集めをり枇杷の花  
思はざる人に訪はるる小春かな  
ポインセチア緋色眩しき飾り窓  
鮫鱈の正体のなく吊られけり

余り菊 小倉正穂

泰治描く里そのままに柿の秋  
無造作に菊人形の余り菊  
大寺の深き静寂や返り花  
**夙の跡や木立の空広し**  
庭石の裾装うて石路の花  
小さき池七彩にして木の葉泛く  
平穏な日は真つ白な古日記

冬 桜 岡田史女

裸木や靄立ちこめし山上湖  
名にし負ふ男体山や霜日和  
さえざえと夕日落ちゆく奥白根  
落とし湯の硫黄のほひ枯木星  
**貴婦人てふ白樺の木や冬の月**  
うすらびや風ととけゆく冬桜  
しろがねのさざ波立つる鳩の池

竜の玉 乙坂きみ子

くるぶしを離れぬ風や竜の玉  
藪の穂に風立つ気配笹子鳴く  
鉄塔の影の全き枯野かな  
実南天一夜の火色加へけり  
大川の音なく流れ百合鷗  
藻の匂ひ藁の匂ひの年の市  
行く年の苦楽を籠めし日記帳

# 万 仞 集

水鳥の光を引きて相寄らず  
熊切修

落葉踏む音を恃みの山路かな  
堺昌子

銀杏散る目路のかぎりの空の碧  
城戸緑

木の葉散る吹きさらしなる喫煙所  
石黒興平

訪へば留守や芋莖と柿干され  
千葉恵美子

洪鐘の肩の緑青冬紅葉  
稲垣佳子

木守柿生きぬくものの艶やかさ  
平尾栄

爛酒の旨さ長子と痛飲す  
小林一榮

洋上の三つ星殊に白く冴ゆ  
伊藤由良

昼よりも夜空の広し冬の月  
松田富枝

紅の朱鷺の羽搏き冬日和	橋場美篤
短日の噴水夕日まみれかな	竹内涼子
蓬髪に見ゆる棕櫚剥ぎ杣の人	青木由芙
ここだけと話の弾むおでん酒	土田亮
木守柿散り散りに雲流れをり	上月智子
万両を褒めて話を始めけり	阿部重夫
連山の紅葉翼下に迫りけり	前川美智子
独身寮の未だ点さぬ師走かな	三橋玲子
風花や比叡山より鳩の湖	内藤庫江
枯れつつも紫蘇の実放つ香りかな	有賀鈴乃

# 巨林抄

湯治場や無数の袖に身を沈め	冬木立天を支へて揺るぎなし	立冬の海の蒼さや鳶の笛	鴨陣を張りて今年の沼となる	一病を持ちて喜の字や石露の花	何となく猫利口げや漱石忌	旗雲の浄土の色や冬の富士	禅寺の襖金色紅葉晴	ぼろ市やいつしか妻を見失ふ	立木みな学費となりて山眠る	枯菊の匂ひかすかや久女の忌	蟻螂の脚の先まで枯れにけり
長尾良子	倉内和子	向佐幸子	川西栄江	米山やすえ	土屋実郎	鈴木英男	沼崎千枝	今村千年	齐藤マキ子	鶴見董子	石井雲雀